

協定海外留学プログラム：1 セメスタープログラム

留学先大学：トゥルク応用科学大学（フィンランド）

芸術学部 デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻 3 年次

M・Mさん

正直私は、ひとりじゃ何もできない。それは、フィンランドに行く前も帰ってからでも変わっていない。まずトゥルクの寮に着くまでのこと。英語力の未熟さが原因で、私は大きな勘違いをしていた。事前のチューターとの連絡で、私は空港の出口でチューターが待っているものだと思って疑わなかった。台風で飛行機が遅れたお詫びの言葉を、入国審査の前後に何度も口ずさんだ。荷物を受け取り、ゲートを出たが、チューターがどこにも見当たらない！ 係員に助けをもらって無事に連絡が取れ、トゥルクまではひとりで向かわなくてはならない、ということが判明した。そこからバスで約 2 時間。ついにトゥルクのバス停でチューターに会うことができた。私のフィンランド留学はそんな、とんでもないスタートだった。

初めのうちは外出もできず、寮にも人があまりいなかったため孤独になり、何もかもが怖くてたまらなかった。これは旅行じゃない、ここに馴染まなくては、と勝手に思い詰めていた。次第に人が増えはじめ、日本人の留学生と仲良くなった。授業が始まる前に一緒に出かけたりご飯を食べたりする中で、恐怖や孤独感は次第に消え、いつの間にか楽しむ余裕ができていた。

授業が始まると、フィンランドの（ヨーロッパ諸国の）授業の時間感覚の違いや帰宅時間の早さ、驚くほどの合理的な考え、企画の進め方の違いや決定までのスピードの早さ、先生との距離の近さなど、あらゆる違いにカルチャーショックを感じつつも、自国で学んできたものとは違ったデザインの世界を知ることは新鮮で、大きな学びとなった。クラスメイトには、フィンランド人のほか、イタリア、イギリス、ドイツや韓国からの留学生たちもいる。ほとんど全員が英語でやり取りをする。そんな中で、不慣れな英語にもだんだんと慣れてきて少しずつ力がついていくのがわかった。

11 月、私はかなり気分が落ち込んでいた。それは、北欧の長い冬のせいだ。辞書のように分厚い雲が一日中空一面を覆い、太陽は自分探しの旅にでも出てしまったかのようなようだった。朝は暗くまだ朝が来た気がしない。夜は眠くならず、生活のリズムが狂う。でもそんな日々にも時々晴れるときがあって、そのときの幸福感たらない。待っていたといわんばかりにあてもなく散歩に繰り出した。

そんな辛い時期を乗り越えられたのは、紛れもなく友人たちのおかげである。私は日本人の留学生の友人たちとほとんどを共に過ごした。辛かったことや悲しかったこと、楽しかったこと、面白かったこと、互いに自由に話した。皆、フィンランドという、留学に少しマイナーな国を選んできているということもあり、留学の目的が単に語学や海外に友達をたくさん作る、ことではなかった。だから、将来

のことや人間関係のこと、フェミニズムなどの社会問題など、よく語り合った。

冒頭で「ひとりじゃ何もできない」と書いたが、帰ってきた今、それを実感している。授業が終わってから帰国までの約 1 ヶ月間、私はヨーロッパをバックパックで旅行した。ひとりで飛行機に乗ることに慣れ、大家族の私は人生で初めて家族から離れひとりで生活をし、ご飯作りも、洗濯も掃除もできるようになった。どこの国でも、困ったら英語で人に聞き助けてもらうことや、勘を働かせて前もって危険を避けることなど、ひとりでできることがたくさん増えた。でも、そこには必ず誰かがいた。留学中に日本で応援し続けてくれた家族や友人、一緒に過ごした仲間たち、共に制作したチームの皆、ひとりじゃきっと何もできていなかった。これまでもたくさん人に支えられてきたが、これからもやはり人ありきの私でいたい。その分だけ人を愛し、人を幸せにしていきたい。そしていつでもどこでも、感謝し伝えることを忘れずに生きていきたい。